

令和元年度事業報告

1 全国シルクビジネス協議会の設立

全国シルクビジネス協議会は、令和元年9月13日東京の蚕糸会館会議室において開催された設立大会において設立された。

協議会の会長には大日本蚕糸会の小林会頭が、副会長には農研機構の吉永生物機能利用研究部門長が、監事には八重洲総合税務事務所 見井田氏が、代表幹事には東洋紡糸工業（株）の鳥越氏が選任され、協議会の事務局は大日本蚕糸会が行うこととなった。

また、協議会には蚕糸分科会、繊維分科会、新機能シルク分科会、新用途分科会、PR分科会の5つの分科会を設けることとなった。

協議会の発起人及び設立趣意書は次のとおりである。

- (発起人) (アイウエオ順)
- (一財) 大日本蚕糸会
群馬県
 - (国研) 農業・食品産業技術総合研究機構
 - (国大) 東京農工大学
興和（株）
 - (株) 島精機製作所
 - (株) JR東日本企画
東洋紡糸工業（株）
 - (株) マッシュビューティーラボ
 - (株) リーバースプロジェクトトレーディング

(全国シルクビジネス協議会設立趣意書)

シルク産業は、かつては日本を代表する産業であったが、生糸の国内外価格差、生活環境の変化、国内繭生産農家の減少等により衰退してきた。

近年、川上から川下までがグループを形成し特徴ある蚕品種を活かした純国産絹製品づくりや遺伝子組換えカイコを利用した新たなシルクの生産が可能となってきている。また、カイコは天然タンパク質の優良な製造昆虫であり、医療や化粧品、食品等のシルク素材の新たな取組みもはじまってきている。

しかしながら、これらの動きは個々の事業者が独自に取り組んでいる段階であり、十分な連携が図られている状況にはなっていない。

このため、シルクに関する情報の共有発信、養蚕農家、シルク関連事業者及び研究者等の連携体制の構築等を通じて、シルクの多様な分野での利用促進を図ることにより、日本産シルクの需要拡大、国内養蚕業の振興及びシルク関連産業による地域振興に資するため、「全国シルクビジネス協議会」を設立する。

2 令和元年度の取組み

(1) 国際養蚕委員会日本大会への参加

1 1月につくば国際会議場で開催された第25回国際養蚕委員会日本大会において、新機能分科会として遺伝子組換えカイコによる新機能シルクについて発表するとともに、PR分科会が中心となって国産シルクのPRブースを出展する等国際養蚕委員会日本大会に積極的に参加した。

(2) 交流会の開催

2月に蚕糸会館で、42名の参加を得て交流会を開催した。交流会では、各分科会の主査から分科会の活動について報告の後、参加者相互の交流を図った。

(3) 会員の募集

シルクビジネス協議会は各分科会が主体となって活動する連合体的な運営を行っていることから、会員の募集についても各分科会が中心となってそれぞれの分科会の活動に賛同又は関心のある事業者、農家、地方自治体等関係者等に協議会への参加の呼びかけを行っている。

この結果、令和2年3月末現在の会員は、正会員10社、協力会員35名となっている。

(4) 国の補助事業の活用

シルクビジネス協議会は自前の活動資金が限られていることから、活動の輪を広げるためには国の助成事業を活用することは極めて有効と考えられる。

このため、農林水産省の「薬用作物等地域特産作物体制整備事業」等への応募に取り組んだが、準備作業を行う時間的余裕が少なかったことから、令和2年度の実績については見送ることとした。

(5) 各分科会の活動

① 新機能分科会では交流会で蛍光シルクや超極細シルク等の新機能シルクを展示紹介するとともに、農研機構が行っているシンポジウム「カイコ・シルク産業の未来」で新機能分科会の活動を紹介する等のPR活動を積極的に進めた。また、超極細シルク緑色蛍光シルクの生産状況や超極細シルク、青色蛍光シルクの新たな第1種使用申請の状況について関係者間における情報の共有化を図った。

② 蚕糸分科会では、今年度の養蚕の状況、課題等について情報交換を行うため、2月に比較的規模の大きな養蚕農家との情報交換会を行った。

③ 繊維分科会では、新たな国産生糸の需要について、国産生糸に関心のある分科会の会員会社と製糸会社等との間でマッチングを図るための打ち合わせがもたれており、今後の展開が期待される。具体的な新製品として、抗菌性シルクマスクインナー、編み機用ウオッシュャブル生糸 等

④ 新用途分科会では、産学官連携協議会である「知の集積と活用の中プラットフォーム」との連携構築を進めた。

⑤ PR分科会では、11月につくば市で開催された第25回国際養蚕委員会日本大会の展示会場において、展示ブースの企画、運営を行い、来場者並びにメディアに国産シルクの魅力を伝えた。